様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２４７３

研究課題名（和文）日本人フランス語学習者の社会言語学的能力の発達過程に関する通時的研究

研究課題名（英文）A longitudinal study of the developmental process of the sociolinguistic competence of Japanese learners of French

研究代表者
近藤　野里（Kondo, Nori）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：７０７５９８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では縦断的な観察を可能とするフランス語話し言葉コーパスを構築し、日本語を母語とするフランス語学習者の社会言語学的能力の発達過程について調査・分析を行った。フランス語学習者の発話において産出される変異形の頻度を量的に分析し、これを縦断的に比較することで、学習者の社会言語学的能力がどのように変化していくのかを明らかにした。また、本研究では教科書コーパスを構築することで目標言語の習得のスタートラインとして用意された規範を同定し、学習者が触れる発音規範の姿を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって日本語を母語とするフランス語学習者の社会言語学的能力の発達がどのように進むのか、その過程を示唆することができた。本研究の学術的意義は、学習者の言語習得に対する規範の影響が強いこと、規範から逸脱した言語使用の習得が容易ではないことを明らかにしたことである。また、本研究では近年出版されたフランス語教科書のコーパスの構築・分析を行うことで、話し言葉の特徴を教科書に反映する方法を模索した。本研究の社会的意義は、社会言語学的能力の習得を促す教材作成に必要な知見を提供することであろう。

研究成果の概要（英文）：Our study constructed a corpus of spoken French that enables longitudinal observation, and conducted an investigation and analysis on the developmental process of the sociolinguistic competence of Japanese learners of French. We quantitatively analyzed the frequency of variants produced in the learners' speech and compared them longitudinally to reveal how learners' sociolinguistic competence changes over time. We also constructed French textbook corpus to identify the norms prepared as a starting point for acquiring the target language.

研究分野：第二言語習得

キーワード：教科書　発音規範　社会言語学的能力　縦断的研究　話し言葉コーパス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

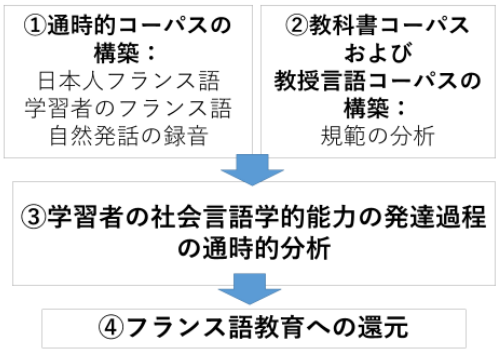
第二言語習得における社会言語学的能力とは、発話状況に応じて、フォーマルな発話コンテクストでは規範的な言語使用を、またインフォーマルな発話コンテクストでは規範から逸脱した言語使用を行うことができる能力である。発話状況に応じて適切なスピーチを産出する能力を習得することで、母語話者との円滑なコミュニケーションが可能になる。1990 年代から今日まで、フランス語学習者の社会言語学的能力に関する研究は主に印欧語母語話者のフランス語学習者を対象に行われてきた。先行研究を土台にしつつ本研究は、目標言語の習得過程において、学習者自身が社会言語学的能力をどのように認識し、規範とは異なる変異をどのような順序で優先的に習得していくのか、という問いを出発点とした。

２．研究の目的

本研究では、縦断的な観察を可能とするフランス語話し言葉コーパスを構築し、このコーパスの分析によって日本語を母語とするフランス語学習者の社会言語学的能力の発達過程について考察を行った。本研究の目的は、学習者の発話にあらわれる複数の社会言語学的変異の頻度を量的に分析し、学習者の社会言語学的能力がどのように変化していくのかを明らかにすることである。また、目標言語の習得のスタートラインとして用意された規範を同定するような研究は、これまでほとんど行われてこなかったため、本研究では教科書コーパスを構築し、これを分析することによって、学習者に提示されるフランス語の学習規範の姿を明らかにした。

３．研究の方法

- 通時的（縦断的）コーパスの構築：縦断的研究を可能とするフランス語学習者の話し言葉コーパスの構築を行った。録音協力者 1 人に対して、2 年間に 1 年ほどのインターバルを置き、少なくとも 2 度録音を実施することが当初の計画であった。しかし、2020 年度以降、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響から、留学が中止になったことで、インターバル後の録音を実施できない録音協力者が多数となった。また、対面での録音が難しい時期も続いたこともあり、2 度の録音を実施できた録音協力者は 8 名に留まったが、学習者の社会言語学的能力の発達を観察できるコーパスデータを構築することができたと言える。



- 規範の分析：教授言語コーパス（フランス語母語話者教員による授業中の発話）の録音はプライバシー保護の理由から断念せざるを得なかったため、教科書コーパスの構築に注力した。様々なタイプの教科書をコーパス化し、分析することで、教科書への社会言語学的変異の反映方法の可能性や最近のフランス語教科書の発音規範を明らかにした。

- 社会言語学的能力の発達過程の縦断的分析：2 回の録音によって作成された縦断的発話コーパスを基に、学習者によるリエゾンの実現頻度や様々な変異形の産出頻度の変化を観察することで、学習者の社会言語学的能力の発達過程を考察し、また学習者が習得を苦手とする変異を特定した。

４．主な研究成果

4.1．規範の分析

フランス語の教科書や発音教本に反映される規範の分析を行うことで、最近の教科書では伝統的な規範に基づきつつも、実際のフランス語の話し言葉の特徴も同時に提示されていることを明らかにした。

- カナダのケベック州で出版された教科書の分析から、教科書へのインフォーマルな変異（否定辞の ne の脱落、代名詞 il(s)の/l/の脱落）の反映方法の可能性を考察した。この研究成果については、外国語教育学会の年次大会とイギリスで開催された Association for French Language Studies の年次大会にて成果報告を行い、『外国語教育研究 22』(2019)に発表した。

- 日本とフランスで出版されたフランス語教科書の音声資料をコーパスとして、リエゾンの実現についての調査を行った。話者にその実現の選択が委ねられている選択的リエゾンコンテクストについて量的分析を行った。リエゾンの実現率が高いコンテクストを特定することで、教科書に反映される発音規範を明らかにした。他方で、教科書におけるリエゾンの実現傾向は、母語話者の自然発話コーパスに見られる傾向に類似する点も多く見られた。日仏で出版された教科書では規範を保持しながらも、オーセンティックな発音を提示する工夫が少なからず行われていることを明らかにした。また、フランス語学習者の発話におけるリエゾンの分析も同時に行い、教科書の規範的な発音の一部がフランス語学習者のリエゾンの習得に影響することも確認した。この成果については、国際研究大会 New Sounds および外国語教育学会の年次大会で報告を行い、『外国語教育研究 23』(2020)に論文が掲載された。

- ロレーヌ大学の Samantha Ruvoletto 准教授と行った共同研究では、日本で出版されたフランス語教科書の音声資料に見られるリエゾンの実現とフランス語母語話者の規範意識を比較することで、特定のリエゾンコンテクスト（「単音節の副詞＋形容詞」（ex. très [z] élégant）、「単音節の前置詞＋名詞句」（ex. dans [z] un X）では教科書が規範的な発音を提示していること、反対に他のコンテクスト（être 動詞の一人称単数形 suis や三人称単数形 est と後続語）では教科書がより話し言葉に近い発音を提示していることを示した。この成果はフランス語学世界大会(Congrès Mondial de Linguistique Française)の論文集 SHS Web of Conferences 78 (2020)で発表した。

- フランスで近年に出版された初級フランス語学習者向けの発音教本 4 冊をコーパスとし、発音教本における規範を同定した。発音教本において、母音と子音の目録がどのように提示されるのか、半広・半狭母音[e, ɛ, ø, œ, o, ɔ]の発音、シュワーの発音、発話スタイルの違いによって生じる変異形、リエゾンについてどのように説明されているのかなど、複数の要素を観察し、分析を行った。この分析によって、教科書における発音規範は伝統的な規範に基づきつつも、実際に話されるフランス語の話し言葉の特徴を同時に提示していること、その一方で教科書に実際の言語使用の特徴を効果的に反映させることの難しさを明らかにした。この成果は Narr Franck Attempto 社から刊行された *La prononciation du français étrangère* (Elissa Pustka（編）, 2021)で発表した。

4.2.社会言語学的能力の発達過程の縦断的分析

縦断的な話し言葉コーパスに基づき、様々な変異の習得を観察することで、日本語を母語とするフランス語学習者の社会言語学的能力の発達がどのように進むのか、その過程を示唆した。

- リエゾンの実現が義務的なコンテクスト（「限定辞+名詞」、「代名詞＋動詞」）については、学習者にとって統語的結束性の高いと考えられる 2 つの語の組み合わせにおいてはリエゾンが実現されやすいものの、綴り字と発音の知識が定着していない語や使い慣れていない連辞を産出する場合には、リエゾンの実現が難しいことが明らかになった。母語話者の発話において、「être 動詞とその後続語」のコンテクストは発話スタイルの違いに応じて実現頻度が変化する選択的リエゾンコンテクストである。母語話者とは異なり、学習者の発話では、リエゾン子音を含む発音形が特定の連辞（je suis [z] allée, c'est [t] un X, X est [t] allé(e)）で記憶され、産出される傾向が観察された。この傾向は学習者の発音習得に対する規範の影響が大きいことを示唆するものである。また、長期留学の経験が、必ずしも発音形のヴァリエーションの習得を促すわけではないこと、朗読タスクと自由会話の違いを意識したリエゾンの実現頻度の調整を可能にするわけではないことが明らかになった。この研究成果は外国語教育学会の年次大会で発表し、その後執筆した論文が『外国語教育研究 25』(2022)に掲載された。

- 学習者の発話における様々な変異形の産出については、インフォーマルな変異形（1 人称代名詞 je の無声化、2 人称代名詞 tu の縮約、代名詞 il(s)の/l/の脱落、否定辞 ne の脱落）の習得に個人差が観察されたといえる。留学経験がある学習者にとっても、je の無声化や tu の縮約のような音声的変異の習得が難しいことが確認された。留学経験がある学習者の発話において最も頻度が高く観察された変異形は否定辞 ne の脱落であった。このタイプの変異形は留学経験がない学習者の 2 回目の録音でも、特定の連辞（c'est pas, je peux pas, je sais pas）で観察されたことから、語の脱落は音の脱落よりも習得が容易であることが示唆された。また、長期的な留学経験がない段階においても、学習者によってはインフォーマルな変異形に気づくことも確認された。この研究成果は『ふらんぼー 48』(2023)で発表した。

4.3．学術的交流について

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響から、国外からの研究者招聘が難しい時期があったため、ハイフレックスでの研究会(「コーパスに基づくフランス語習得研究とその応用」)を企画し、2022 年 10 月 27 日に開催した。この研究会にロレーヌ大学（フランス）の Samantha Ruvoletto 准教授をオンラインで招聘し（講演題目：« Parler et écrire en français : une langue, deux modalités »）、研究交流を行った。

5．今後の展望と課題

縦断的コーパスを拡充することで、フランス語学習者の社会言語学的能力の習得過程について、より一般的な結論を導き出すことが今後の展望である。また、今後のデータ収集の際には、録音協力者がフランス語の言語変異についてどのような知識を持っているのかを問うアンケートや、社会言語学的能力の習得に対して学習者がどのような意識を持っているのかを調査するためのアンケートなども同時に行うことが望ましく、これは今後の課題である。

フランス語教育への還元としては、今後は変異形の作り方、それぞれの変異形が使用される発話スタイルの違い、母語話者による変異形の産出頻度を提示することで、より明示的な説明を教科書に反映させること、また変異形の使用を知覚させるための音声教材の作成を目指す。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 近藤野里	４．巻 48
２．論文標題 日本語を母語とするフランス語学習者における言語変異の習得 縦断的発話データに基づいた分析	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ふらんぼー = Flambeau	６．最初と最後の頁 122-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/124884	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 近藤野里	４．巻 25
２．論文標題 縦断的な発話データに基づくフランス語学習者のリエゾン習得の分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 外国語教育研究	６．最初と最後の頁 93-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 近藤野里	４．巻 30
２．論文標題 Paul PassyのLe Francais Parle (1889)におけるリエゾンについて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 青山フランス文学論集	６．最初と最後の頁 94-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/22110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 近藤野里	４．巻 23
２．論文標題 フランス語教科書でのリエゾンとフランス語学習者のリエゾンの実現	５．発行年 2020年
３．雑誌名 外国語教育研究	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Samantha RUVOLETTO, Nori KONDO	4．巻 78
2．論文標題 La liaison variable : des manuels scolaires japonais au jugement de locuteurs natifs	5．発行年 2020年
3．雑誌名 SHS Web Conf, 7eme Congres Mondial de Linguistique Francaise	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1051/shsconf/20207807010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 近藤野里	4．巻 11
2．論文標題 ケベックのフランス語教科書に反映される語彙的および統語的特徴	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ケベック研究	6．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 近藤野里	4．巻 22
2．論文標題 ケベック州で出版されたフランス語教科書にみられる社会言語学的変異の反映の方法	5．発行年 2019年
3．雑誌名 外国語教育研究	6．最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nori KONDO	4．巻 46
2．論文標題 La prononciation des pronoms il et ils de la fin du XIXe siecle Analyse basee sur Le Francais Parle de Paul Passy	5．発行年 2018年
3．雑誌名 SHS Web Conf. 6e Congres Mondial de Linguistique Francaise	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 近藤野里
2．発表標題 縦断的な発話データを用いたフランス語学習者によるリエゾンの習得の分析
3．学会等名 外国語教育学会第25 回研究報告大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 近藤野里
2．発表標題 フランス語発音教本にみられる発音の説明と規範について
3．学会等名 日本フランス語学会第331回例会
4．発表年 2020年

1．発表者名 Nori KONDO
2．発表標題 Comment presenter les variations sociolinguistiques dans les manuels de FLE ? Le cas des manuels publies au Quebec
3．学会等名 Association for French Language Studies Colloque annuel（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Nori KONDO
2．発表標題 Phonetic Norm in French L2 Textbooks and Its Effect on L2 Learners’ Speech Competence - The Case of French Liaison
3．学会等名 New Sounds the 9th International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 近藤野里
２．発表標題 フランス語教科書におけるリエゾンとフランス語学習者のリエゾン
３．学会等名 外国語教育学会第23回研究報告大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nori KONDO
２．発表標題 La prononciation des pronoms il et ils de la fin du XIXe siecle Analyse basee sur Le Francais Parle de Paul Passy
３．学会等名 6eme Congres Mondial de Linguistique Francaise（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 近藤野里
２．発表標題 ケベック州で出版されたフランス語教科書と話し言葉としてのケベック・フランス語の語彙的・統語的特徴
３．学会等名 日本ケベック学会2018年度全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 近藤野里
２．発表標題 ケベック州で出版されたフランス語教科書にみられる社会言語学的特徴の反映の方法
３．学会等名 外国語教育学会第22回研究報告大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Elissa Pustka	４．発行年 2021年
２．出版社 Narr Francke Attempto	５．総ページ数 483
３．書名 La prononciation du francais langue etrangere: Perspectives linguistiques et didactiques （研究代表者は「La prononciation dans les manuels de FLE : entre norme d’orthoepistes et usage reel」を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 コーパスに基づくフランス語習得研究とその応用	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関